No. 110

ティー・ブレイク

Tea Break

夏の終わり

日本の夏といえば，セミ，スイカ，そして終戦記念日である。この時期には，戦争に関する多くの番組も放映されるので，日本の夏というのは，どこか暗いイメージがつきまとう。これは，戦争が終わって60年経った今でも，そう大して変わらないような気がする。

子供の頃の夏といえば，夏休みとカキ氷。そしてあの頃は，エアコンなどなかったから汗をかきかき作業する両親の姿が思い浮かぶ。そういえば，最近の地球の温暖化現象により，夏の暑さというのは異質のものになってきているようである。現に，気温が上昇したことによって，セミの生態系は変わりつつある。郷里の千葉県でも，夏といえばアブラゼミで，ツクツクボウシやヒグラシなどの透明な羽を持ったセミを捕まえると，両親に自慢したものである。それほどに，羽の茶色いアブラゼミが全盛であった。

ところが今では，アブラゼミを見ることは少なくなった。代わりに，もともとアブラゼミよりも南方に生息していたクマゼミが出没するようになり，透明な羽のセミは少しも珍しくなくなってしまった。かえって，茶色い羽のセミの方が珍しいぐらいである。そして，夕刻になっても温度が下がらないことから，ヒグラシの声を聞くこともほとんどなくなってしまっている。

ところで，最近では，広島への原爆投下を「正しい」という日本人が増えているそうである。聞いた話によると，若者だけでなく，年配の人もそう思っている方がいるようで，全体の20％以上が，広島に原爆を落としたことを支持しているというのである。けれども，アインシュタインですら，自分の研究の成果として作られた原子爆弾が広島に投下された時に「なんていうことだ」と言って嘆いた。

父から聞かされた戦争の話。無差別に降り注ぐ焼夷弾，機銃掃射，逃げ惑う人たち，防空壕。こうしたことは，夏になるたびに，なぜか思い出されてくる。子供の頃に放映された「宇宙戦艦ヤマト」では，圧倒的な攻撃により，次第に戦力を失い，滅亡に向かっていく地球の姿が描かれている。無差別に，情け容赦なく降り注いでくる遊星爆弾は，焼夷弾の無差別投下を彷彿させるし，遊星爆弾の落下に伴う巨大なキノコ雲は原子爆弾，そしてそれによる放射能汚染と真っ赤になった地球は，とりもなおさず，焦土と化した広島と，燃え上がる日本家屋を象徴しているようにも思われる。

そこでは，地球人は地下都市を築いて必死に防戦し，生き延びようとする。まさに，父から聞いた防空壕そのものである。そして，最後には，地球に情け容赦のない攻撃を仕掛けてくるガミラス人というのは実は，地球人と「皮膚の色が違うだけで，同じ人間」であったというオチまでついている。実際には，日本人の中でも戦争というのは終わっていないのではないだろうか。

けれども，よくよく考えてみれば，変わらないもので，良いものもある。それは，故人の面影である。この夏と共に思い出される母の姿というのは，汗を拭き拭き作業をする姿であるが，その姿はいつも生命力に満ち溢れている。この季節に思い出されるのは，棺の中に入った青白い顔ではない。けれども，夏の終わりと共に，そうした血色のよい母の姿というのはなぜか思い出せなくなる。60年の変化の中でも，忘れたいことも，忘れられないことも多く，どこか暗いイメージがつきまとう日本の夏ではあるが，それでもやはり夏の終わりは淋しいものである。　（正）